

2 身辺雑記―芝居とか、映画とか― 谷口晃

今、近代から現代までの三重県の演劇史を調べている。本当はシナリオをも書きたいのだが、演劇史が一段落してからと思つて、作業を急いでいる。もともと不器用で一つのことをやりだすと、掛け持ちは無理で、その上の寄る年波である。資料を探し出すにも沢山のファイルと格闘して次の日によろやく見つけることもしばしばで、書くより探す方に時間をとられてなかなか捗らない。林久登さんから原稿のお誘いがあつて、何を書こうかと考えたが、今の作業でいっぱい、いっぱい、それに関連していることを書こうと思うに至つた。

演劇史はもう戦後まで来ているが、終戦直後の演劇史で足踏みしている。終戦直後から朝鮮戦争の50年までの数年間、日本は解放された民衆で溢れ、あちこちで、芝居作りに熱中した話が残っている。ウチのお父ちゃん、家放りだして伊賀の方まで巡業に行つとつたよ、という話まであるのに証拠のチラシなどは伊勢湾台風で流されてしまつたりして、ほとんど残っていない。関係者も他界した人が多く、ほとんど話を聞くことができない。青年団演劇、農民演劇、職場サークルの演劇等が行なわれたという話が残っているのだが・・・見つけ出して、終戦直後の芝居を作っている民衆の躍動が描けたら面白いモノが出来ると思うのだが、見つからない。

50年代に入ると記録もずいぶん確かになつて、霧が晴れたようにクッキリと見えてくる。その内の一つ、四日市市泊の東亜紡織の澤井余志郎氏が指導したサークル「生活を記録する会」は、演劇史にとつて重要である。澤井氏は四日市公害の語り部として有名な方だが、実は一度もお会いしたことがない。澤井氏と行動を共にしていた伊藤三男さんに取材を申し込み、会える手はずをとつた矢先の訃報だった。その後、伊藤三男さんから、2月6日10時半から、澤井さんの追悼集会をするので参加しませんかというメールをいただいた。

澤井余志郎氏は浜松出身の人である。氏の著書『ガリ切りの記』によると、小学校を出ると実業学校の紡織科に入られる。二人の兄は旧制中学を出て、旧制高校に行っているのに：と父親に抗議したがいかんともしたがたく紡織科を出て、戦中、四日市の陸軍製絨廠（せいじゅうしよう）に入り、戦後、製絨廠が民間に払い下げられ、東亜紡織泊工場になりそのまま勤務する。

泊工場では女子工員の監督官の役割であつたが、工員の風紀はあまり良くなかつたという。「ボタンコ」という蔑称があつたが、部分的にはそれが当てはまるような集団であつて批判的に見ていたという。49年に新制中学第一期卒業生が集団で就職してきた。彼女らは以前の女子工員と明らかに違つていた。はつきりとモノをいう女子工員たちに、この娘たちとなら一緒に運動がやれると思つたという。その頃工場に

は、映画鑑賞サークルや、演劇サークル、音楽サークルなどがあった。歌声運動や、芝居作りのサークル活動が停滞した頃、澤井氏は無着成恭の『山びこ学校』を知る。『山びこ学校』を読んで、純粹に感動した澤井氏は、自分が担当している女子工員のグループにも『山びこ学校』を読ませ、生活記録運動を展開する。

自分たちの書いた綴り方を持ち寄った工員たちは、最初は恥ずかしがって人前で読まなかったという。見かねた澤井氏は女子工員のひとりの綴り方を強引に取上げ、みんなの前で読んだという。読まれた本人は泣いたが、聞いていた周りのみんなはホッとした表情をしたという。貧乏なのは自分だけではないと思ったからだ。出来れば将来は農村で暮らしたくない、母のように貧しい農家の嫁として過酷な農作業をして一生を送りたくないと思っていた。

澤井氏の「生活を記録する会」は女子工員たちに徐々に理解され支持されるが、会社からは批判の目で見られる。女子工員達は綴り方運動を通じて社会の矛盾に気付き、何より自分たちの働いている高い塀に囲まれた工場の矛盾を深い部分で見抜くようになった。澤井氏に学ぶべきは、女子工員たちの提出した綴り方を黙々とガリ切りをして、セッセと文集にして出したところである。

やがて東京から劇作家の木下順二や鶴見和子が、泊工場の実践に注目してやってくる。交流が生まれ、木下順二、鶴見

和子編で『母の歴史』河出新書が出版される。それを読んだ東京の劇団三期会の青年たちが、泊の女子工員の生活を芝居にしようと動き出した。三期会の広渡常敏が脚本『明日を紡ぐ娘たち』を担当し、東京から四日市へ十数回に渡って訪問し、また彼女たちの故郷、長野県伊那谷へ、三期会の劇団員が集団で泊り込み、交流を深めていった。

稽古に入ると泊から東京へ女子工員たちが毎週夜行で交代で練習に付き合い、完成に漕ぎ付けた。脚本は、三期会と「生活を記録する会」の間で何度かの討論の末に出来上がったもので、女工哀史のような暗さはなく、ラストシーンも農家の嫁になって身籠った静枝をみんなで励ましに行くという明るい未来を暗示するものであった。

だいぶ下るが六七年、名古屋の劇団演集が公演した『明日を紡ぐ娘たち』の朝日新聞の劇評(抜粋)が残っている。「一若さに満ちた舞台一全体に若さに満ちた、すがすがしい舞台である。工場内文集づくりを通して娘たちが同じ境遇の仲間と手を取り合い、毛ぎらいしていたふるさとの農村の「母」を目ざして村に帰ろうと誓い合うまでを描く……(後略)」

作品の評価は高く、1957年の第三回岸田國士・佳作賞に広渡常敏と「生活を記録する会」の双方が受賞する。広渡常敏31才、澤井氏この頃29才。澤井氏は55年9月、就業規則違反を理由に懲戒解雇になり、大阪地裁に解雇無効の

訴えを起す訴訟を抱えていた。会社側が「生活を記録する会」にかけて来た露骨な弾圧である。一番は澤井側勝訴で終わるが、澤井氏は周りを巻き込むことに配慮して、和解に応じ会社を退職する。澤井氏はその後、公害闘争のシンボルの存在となるが、むしろ泊工場の実践の頃を懐かしく振り返ることが多かったと、伊藤三男さんはいっていた。

2006年にピンクシナリオ賞を取って作品が映画化され、シナリオ作家協会に入れて頂いた。協会への入会資格は、映画化した作品があつて、二人以上の協会の推薦人があることで、私はシナリオ学校『シナリオ講座』の恩師、井上正子先生と、井上先生ご紹介の、荒井晴彦さんになつていただいた。荒井晴彦さんとはその後、秋田の十文字映画祭や、熊野の中上健次顕彰の「熊野大学」などに一緒に一緒にさせていただき、身近に接し親しみを感じている。荒井さんは作品を発表すると、私のような実績のない者にも感想を求めて来る。去年監督した『この国の空』も、どうでした？と訊いてくる。私は「見終わって映画館を出る時に、ああ、荒井さんは、やっぱり文学だなあー」と思ったと正直に答える。彼は当然不満である。しかし、そのような荒井さんの自分の作品に対するこだわりをこそ見習うべきなのだろうと思う。

「年末になると谷口さんを思い出します。来ませんか」毎年シナリオ作家協会は忘年会をやっている。そこで会って二

次に新宿へ繰り出し徹夜で飲み、もっぱら映画を語るというのが定番である。外がシラジラと明けて来るまで飲むことを荒井さんに教えていただいた。まだ純真であった田舎の退職教師である。荒井さんは、去年もその忘年会に誘ってくれた。大御所の人たらしである。荒井晴彦さんを突然出してきたのは、氏のシナリオ集に『シナリオ 神聖喜劇 原作大西巨人 脚本荒井晴彦』という長編の大作があつて、その作品を映画化することについての監督として、澤井信一郎氏が予定されていることについて書きたかったからである。

『シナリオ 神聖喜劇』は大西巨人の長編小説『神聖喜劇』をシナリオ化したもので、四百字詰め原稿用紙にして750枚、シナリオを読むだけでも丸3日以上も掛かるといふ長大なもので、映画化すればベルトルツチの『1900年』の5時間16分をはるかに越えるものになると思われる。私は、このシナリオ一冊で荒井晴彦さんを無条件に尊敬してしまつた。

四日市の方ならご存知だと思ふが、澤井信一郎氏は前述の澤井余志郎氏の弟さんであり、荒井晴彦さんとも映画『Wの悲劇』などの共作がある方なのだ。『神聖喜劇』は軍隊と天皇制を問う硬質で重厚な作品で、雑誌「新日本文学」に連載されていた頃、時々飛ばし飛ばしに読んで記憶がある。六〇年代安保の時代を生き抜いた若者は、みんなどこかで『神聖喜劇』に触れていたように思う。荒井さんに年末、澤井余志郎氏の

ことを電話で話したら、「澤井さん兄弟は周りから左翼三兄弟といわれていたそうで、兄弟三人とも錚錚たる左翼だと聞いてましたが、やっぱりそうだったんですね」といつてみえた。

まとまりのない文章を書いてしまった。澤井余志郎氏について、元気なうちにお会いして話したかったという悔いが募るばかりである。伊藤三男さんは古くからの知人であるが、誇らしげに澤井氏のことを話すので、羨ましくて仕方がない。生涯を反権力の側に立って無償の行為をコツコツと実践し、生き抜いた姿は見事としか言いようがない。澤井氏の著書『ガリ切りの記』の表紙に、ランニング姿で独りガリ切りをしている写真が出ているが、あの象徴的なスポットは、わたしたちに大切なことを語りかけてくれているような気がする。本当に闘うとはどういうことなのかを……。2月6日にはひっそりと去って行った澤井余志郎氏に、ひっそりお別れをしてこようと思っている。

